

## 雪国の人へ

川合千史

愛知県・二二・大学生

「氷見<sup>ひみ</sup>」。素敵な響きの地名だと思いました。あなたの生まれた町。まだ学生だったあなたは、二つ年下の私に氷見のことをたくさん話してくれたね。

あなたが氷見に帰ってから、淋しい日々が続きました。私の知らない町にいるあなたがとても遠くに思えてならなかったの。

初めて私が氷見を訪れたのはバレンタインデーだったね。あなたは驚いてたでしよう。初めての土地に一人で行くことは、私にとって冒険でした。早く会いたい気持ちとちよっぴりの不安、そして心を込めて焼いたチョコレートケーキを鞆<sup>かばん</sup>につめて、朝いちばんの「しらさぎ」に乗りました。車窓の風景はどんどん変わってゆき、あつという間に雪景色。浜松で育った私にはまるで未知の世界、銀河鉄道に乗っているような気分でした。迎えてくれたあなたは、すっかり雪国の人でしたね。

それから春、夏、秋と、北陸の四季を一瞬ずつ旅してきました。この一年、離れて

いた分すれ違いもたくさんあったけど、乗り越えてきたね。不器用だけどまっすぐなあなたの生き方に、私はたくさんのことを学びました。どんなことも直球で勝負してくるから、さすがの私も意地を張ることがばからしくなって、前よりすごく素直になったよ。「会いたい」も「好き」も、今、素直に言えるよ。周りばかりを気にして小さくなっている私に、「千史が自分らしくいきいきとしていられればそれでいいじゃないか」って言うてくれたね。ありがとう。今、私を支えているのはあなたです。

また、冬が来るね。氷見に雪が積もるね。冬が好きだというあなた。寒いのが苦手な私だけど、あなたの心に冷たい雪が積もった時、ほわっとあたためてあげられる、ぽかぽかのおひさまみたいな存在になれたらいいな。

早く二人の間の雪がとけて、私たちに本当の春が来るといいね。

\*彼は同じ大学の先輩で、今、富山県で働いています。